

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 宇都宮 美生

中国では隋の煬帝のときに大運河が築かれ、宋より以降は、都城の多くは大運河沿いに築かれるようになる。こうした都城と運河の関係を考えていくうえで、煬帝が築いた洛陽城は重要な研究対象である。本論文はこの隋唐洛陽城の水利について研究したものである。

第一部は隋唐洛陽城をとりまく水系および水利施設について考察する。第一章では隋唐洛陽城に流れ込む河川の河道とそれと関わりをもつ水利施設、第二章では隋唐洛陽城を貫流する洛水の役割、第三章では秦漢から隋唐にいたる洛陽城と穀水の関係、第四章では煬帝が建設した通済渠と通遠渠の流路の復元と役割が考察される。以上の考察を通じて、隋以前から洛陽城は穀水を引いて水源として利用してきたが、煬帝はあえて洛陽城を穀水が瀘水や洛水と交わる場所に築き直したこと、さらに隋唐洛陽城は都城の中央に河川を貫流させるという中国では特異なプランをもつ都城であったが、そこには河川と運河を有機的に結びつけ、防衛や防災にも用いようとする意図があったこと、それによって隋唐洛陽城では大量輸送を可能とする運河と都城の連結が実現したことなどが明らかにされる。

第二部は隋唐洛陽城の西側に築かれた広大な皇帝の専有空間である西苑と城内の大規模食糧貯蔵施設である含嘉倉について考察する。第一章では従来明確でなかった西苑の範囲や附属施設、第二章では西苑内における河道や水利が考察され、これによって西苑が隋唐洛陽城に流れ込む河川の水量を調節する役割を果たしていたことが明らかにされる。第三章では含嘉倉について、隋代に始まるとされてきた通説を覆し、唐の高宗以後に現れて大規模な貯蔵施設となったこと、第四章では隋代に置かれた洛口倉・回洛倉・子羅倉と唐代に置かれた含嘉倉の規模や性格が検討され、隋の三倉が唐の含嘉倉に一元化されていく過程が考察される。これによって副都としての洛陽城の存在が、隋唐帝国の漕運体系の構築に重大な影響を及ぼしていたことが明らかされた。

本論文は、著者の長年にわたる現地でのフィールドワークの成果を基に、最新の発掘成果と豊富な文献資料を加え、隋唐洛陽城の水利を体系的かつ機能的に明らかにし、さらに隋唐洛陽の倉庫制度の全貌を明らかにしたものであり、極めて参照価値の高い論文である。水利発展の背後にある社会経済的背景や技術的背景の追求になお弱い部分があり、瀘水と伊水の研究に検討の余地を残すとはいえ、城壁や宮殿など地上建造物を主な考察対象としてきた従来の都城研究に対し、水利に着目して隋唐洛陽城の画期的な性格を導き出したことは高く評価できる。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）に相応しいものであると評価する。